

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

平成 25 年 1 月 13 日

基本情報

鈴木聖子、平成 24 年度夏個人派遣：PD

研究課題名

科学としての日本音楽研究の誕生

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

(日本語) フランス・パリ・パリ第七大学 (パリ・ディドロ)・東アジア文明研究センター・アニック・ホリウチ教授

(2) 派遣機関

開始日：平成 24 年 5 月 3 日 / 終了日：平成 24 年 12 月 31 日 / 総日数：242 日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

本研究は、日本音楽研究の開拓者である田辺尚雄 (1883-1984) における音楽の価値判断の変遷を通して、日本音楽研究という科学の形成過程を明らかにするものである。この派遣を通じては、田辺が 1909 年～1910 年に『東洋学芸雑誌』に発表した古代中国の音階理論、中国と日本の雅楽音階理論、江戸元禄期の数学者中根璋の音律論に関する諸論考の意味を検討する。その上で、彼の初期の日本音楽研究における東洋 (中国・日本) と西洋の音楽理論の関係を科学史の視点から分析する。

(2) 達成された成果

明治新政府のもと、軍隊や教育制度を通して公的に「西洋音楽」が導入された日本では、「日本音楽」とはいかなるものであるべきであるかという「国楽 National music」論が、音楽に関する言説の中心を占めた。そこでまず音楽研究に求められたことは、西洋音階の研究に依拠した日本音階の研究であった。こうして日本の音階はつねに西洋の音階との比較において研究されることとなる。田辺の日本音楽研究もまた、この明治初期以降の音楽研究史の上に位置づけられるものである。

田辺が日本音楽を研究の対象とし始めたのは、1907 年夏、彼が東京帝国大学理科大学物

理学科の大学院に進学したときであった。それ以前、大学時代には、彼は独自の西洋音楽研究「音楽的音響学」の樹立を目指していた。「音楽的音響学」とは、当時画期的であったヘルムホルツの生理学的な音楽理論を、音階・リズム・旋律・和声というより実践的な音楽理論へ結びつけようとしたものである。彼の最初の日本音楽研究は、この「音楽的音響学」のうちに位置づけられる、音階の研究として開始される。

1909年から1910年にかけて、田辺は『東洋学芸雑誌』に古代中国の音階理論、中国と日本の雅楽の音階理論、元禄期中根璋の音階理論についての論文を立て続けに発表する。その一方で、師の物理学者・田中正平(1862-1945)が設置した「邦楽研究所」で、山村流の日本舞踊を習得したり、主に三味線音楽を五線譜に採譜したりすることを通して、「粹」という異色の視点からの俗楽音階の研究に心血を注いだ。彼の俗楽音階に関する主な論考には、「日本音楽の粹を論ず」(『歌舞音曲』、1909年1月)、「日本音楽の理論 附 粹の研究」(『哲学雑誌』、1909年3月)、そして「日本俗楽論」(『早稲田文学』、1910年9月)がある。そこで主張されているのは、「五度旋法」と「四分音化」こそが、日本音楽の独自性(=「粹」)を産出する鍵であるということである。「五度旋法」とは、完全八度(オクターブ)の絶対協和音程と、完全五度(例えばド・ソ)の完全協和音程のみに基づく「正しい」音階を作る方法で、古代中国・日本の雅楽から日本の俗楽へともたらされたものとされた。また「四分音化」とは、その「正しい」音階から旋律の音程が四分音(半音の半分)外れる美的な変化で、これが日本俗楽音階の大きな特徴とされた。

この田辺の音階理論が、「不純な」近代西洋の平均律(オクターブ以外に純正音程を含まない音階)に対する「純粋な」日本の音階という物語を語るために創出されたことは明らかである。またそれは、師の田中がヘルムホルツの助言に導かれて取り組んでいた純正律(単純な整数比による純正音程にできるだけ基づく西洋音階)の理論に寄り添うものでもあった。田中が未来の日本音階として西洋の純正律を採用しようとしたことと比較すると、田辺は過去の日本音階のうちに「五度旋法」と「四分音化」という、純正律の理論にも共通する要素を発明したといえる。そうすることで田辺は、師の純正律の理論に歴史的な肉付けを与えたのである。

こうした視点から観察すると、『東洋音楽雑誌』に発表された田辺の一連の論文は、東洋(中国・日本)の音階理論に、すでに近代西洋の平均律・純正律と同じものが見られるということ、そして東洋においては純正律が採用されて平均律は実践されなかったことを、歴史的に発明するものであったことが理解できる。興味深いのは、最終的には彼は中国の音階理論を「迷信」を含む非科学的なものであるとして、西洋の音階理論の立場から否定していることである。

以上から、日本音楽研究の誕生当時のパラダイムにおいては、日本音楽の独自性を科学的に証明するために、東洋の科学の歴史性を利用しながらも、西洋の科学を用いねばならなかったことを明らかにした。

(3) 今後の研究展望

上に述べた日本俗楽音階の論考三部作のうち、田辺は最初の二作において日本俗楽音階の独自性を「粹」という価値判断のうちに見出した。ところが、最後の「日本俗楽論」では、やはり日本俗楽音階の独自性を主題としているにも関わらず、突如として「粹」について語ることを止めている。なぜ田辺は「粹」の理論を捨てたのか。その最も大きな理由としては、彼が「粹」を自然科学的に語ろうとして音階を数値化すればするだけ、音階は多様となり、人文科学的な「粹」という定義が多くの例外をはらむ結果となったことが挙げられる。また当時、「粹」という花柳界との繋がりが深い概念を語り続けうることを、科学の場が許さなかったことも、重要な理由のひとつとして挙げられよう

田辺の「粹」の研究からおおよそ 20 年後、九鬼周造が『「粹」の構造』(1930 年)を著す。『「粹」の構造』もまた、1930 年当時の京都学派中心の哲学の場において異色の論考であった。九鬼は「粹」に日本民族の独自性を求めようとする点で、田辺の構想に近いものを持っている。『「粹」の構造』には日本音楽についての記述が少し見られ、その草稿には、九鬼が田辺の「日本音楽の理論 附 粹の研究」を参照したことが記されている。このようなことから、田辺の「粹」の音階理論と、九鬼の『「粹」の構造』の殊に音楽についての記述を比較することで、田辺が「粹」への言及を続け得なかった明治後期のパラダイムをより明確なものとすることができると考える。